第３章　遺跡の概要

１．史跡津軽氏城跡弘前城跡の概要

（１）近世大名津軽氏の成立と弘前城築城

近世大名･津軽氏は、諸史料からもとは南部氏の一族であったと考えられている。南北朝の争乱後、南部氏は十三湊・安藤氏の勢力圏であった津軽地方に進出し、安藤氏を駆逐する。その後、安藤氏再侵攻への押さえとして津軽地方へ派遣されたのが、津軽氏の祖となる南部光信である。

光信は延徳３年（1491）に種里城を築き、そこを拠点として南部氏の津軽経営の一翼を担った。さらに光信は文亀２年（1502)､鼻和郡賀田に大浦城を築き､子の盛信を配置する。盛信の子孫は「大浦」姓を名乗り、大浦城は築城から 90 年余りの間、大浦氏の居城として機能したとされる。

光信の５代後となる南部右京亮（大浦）為信は、元亀年間（1570 ～ 73）に石川城の南部高信を攻め落として以降、南部側の城を攻略して津軽地方の切り取りをはかり、天正 18 年（1590）頃までには豊臣政権に津軽地方の領有を認められた。為信は姓を「津軽」と改め、ここに近世大名・津軽氏が成立する。

為信は文禄３年（1594）に本拠を大浦城から堀越城へ移し、以後、堀越城は慶長 16 年（1611）までの 17 年間、津軽氏の居城となった。この城は羽州街道上の要衝に立地し、また、旧南部氏の勢力圏であった岩木川東岸を治めるのに適していた。為信は本拠移転に伴い、縄張りを求心的な構造とするとともに､本丸に礎石建物を配するなど大規模な改修を行っている（弘前市教育委員会 2000 ～ 14)。しかし石垣は導入されず、城下への家臣団等の集住も不十分であるなど、中世城郭から近世城郭への過渡期的様相を示しており、そのためか、為信はまもなく「高岡」の地に新城の築城を計画したようである。

『津軽歴代記類』等の文献によると、為信は慶長８年（1603）に「高岡」への町屋建設を命じるが、築城には着手することなく同 12 年（1607)、京都で没する。弘前藩官撰史書『津軽一統志』（享保 16 年（1731）成立）には､「高岡」への築城は２代藩主･津軽信枚により慶長 15 年（1610）から進められ、翌 16 年に完成したとある。この「高岡城」は本丸南西隅に５層の天守を構えていたが､『津軽一統志』等によると､寛永４年(1627)に落雷のため焼失する。翌５年に地名が｢高岡｣から｢弘前｣へと改められ、城の名称も「弘前城」となった。以降、弘前城は明治維新まで津軽氏の居城として、また弘前藩政の中心地として機能することとなる。

なお、当初４万５千石であった弘前藩は、４代藩主津軽信政の代に起きた寛文９年（1669）の寛文蝦夷蜂起(シャクシャインの戦い)以降､｢北狄の押え｣として蝦夷地警備の公的役割を担うようになる。その後蝦夷地警備の功が認められ、文化２年（1805）には７万石、同５年（1808）には 10 万石への高直りを果たしている。

（２）史跡津軽氏城跡弘前城跡

「史跡津軽氏城跡弘前城跡」は、近世大名津軽氏の居城として築城された「弘前城」と、城下町の外側につくられた防御施設（惣構）である「長勝寺構」･「新寺構」で構成されている（図版１)。

「弘前城」は岩木川の右岸段丘上、標高 29 ～ 46mの地点に立地する平山城である。築城時は本丸・内北ノ郭（現在の北の郭)･二ノ郭（現在の二の丸)･三ノ郭（現在の三の丸)･北ノ郭（現在の四の丸)･

西ノ郭（現在の西の郭）・西外の郭（現在の弘前工業高等学校付近）の７つの郭で構成されていたが、文化２年（1805）「御城郭分間真図」には、「西外の郭」が城郭内から外された様子が描かれている（弘前市立博物館 1984、弘前市・弘前市教育委員会 2010）。現在は本丸・北の郭・二の丸・三の丸・四の丸・西の郭の６郭で構成される城跡であり、かつての「西外の郭」は史跡指定範囲から外れる。城跡の規模は南北約 1,000m、東西約 500mを測り、総面積は約 50ha に及ぶ。三方・三重に巡らされた濠と、西側の蓮池・西濠（元は岩木川（樋ノ口川）の流路）も、ほぼ築城時と同じ状態で現存する（図版２）。

基本的には土塁で囲まれた城郭であるが、本丸の周囲にのみ石垣が巡る。本丸は城郭の中央部に位置しており、標高は 46mである。南北 130m、東西 93m、面積 14,188 ㎡を測り、南側に馬出しの小郭を配置する。本丸南東隅に現存する３層の天守は文化７年（1810）、蝦夷地警備の功が認められた９代藩主津軽寧親により、文化７年（1810）に櫓造営の名目で再建されたものである。そのほか、近世期には本丸南西隅の５層天守・あるいは南東隅の３層の天守のほか、中央に本丸御殿、南に御白砂御門、北に北門が存在した。

史跡内には天守のほか、５棟の城門・３棟の二の丸隅櫓が現存しており、９棟すべてが重要文化財に指定されている（図版２）。惣郭がほぼ現存し、建造物も多く残存するのが本史跡の特徴といえる。

「長勝寺構」は、弘前城の南西約１㎞に位置する（図版１）。慶長 15 年（1610）、２代藩主信枚は堀越並びに近隣地域の寺院・神社に対し、新しい城下町への移動を命じた。元和元年（1615）には、弘前城南方の茂森山を切り崩し、土居・濠・桝形を設け、その西側に曹洞宗三十三ヵ寺から成る寺院街を置いた。これが「長勝寺構」であり、弘前城の外曲輪としての機能を果たした。

「新寺構」は、弘前城の南約１㎞に位置する（図版１）。弘前城南域の要衝として構築された防御施設であり、「南溜池」とその南東に配置された大円寺（現在の最勝院の位置に、かつてあった寺院）から成る。「南溜池」は土居を築き貯水した施設で、慶長 17 ～ 19 年（1612 ～ 14）に信枚により築かれた。有事の際、土居を破って「南溜池」と土淵川を結び、防衛線とする意図があったものと推測される。

これら史跡指定範囲のうち、今回の調査の対象となったのは「弘前城」の本丸に当たる部分で、解体修理計画のある東側石垣の背面を発掘調査した（図版２）。この範囲には、明治初期の「御本丸建物之図」（弘前市立図書館蔵）等に記載される井戸が所在する。また、古写真より、明治初期まで石垣沿いに本丸を巡る白土塀があったことが分かっている（図版７～ 14）。

２．弘前城跡本丸東側石垣の履歴

（１）近世の本丸東側石垣

弘前藩官撰史書『津軽一統志』（享保 16 年（1731））や『封内事実秘苑』によると、弘前城築城の際、本丸の石垣に使用する石材は長勝寺南西の石森や岩木山麓・兼平の石山（いずれも弘前市）、大光寺（平川市）、黒石や浅瀬石（黒石市）などの古城館から運搬したされる。また、『津軽徧覧日記』（弘前市立図書館所蔵・八木橋文庫）などには、「伊藤六右衛門」・「服部孫助」が石垣普請を担当したこと、普請に５～６年かかったこと、「鶴石」・「亀石」という巨石を石垣内に組み込んだことなどが記録されている。

弘前城本丸東側の石垣は、根石からの高さが天守台部分で約 15m、その他の部分で約 13mを測る高石垣である。この東側石垣は、文献資料等から、近世期の３時期に構築された石垣で構成されるものと想定されていた。

最も初期の石垣は、慶長の築城時に築かれたとされる野面積の石垣である。弘前市立博物館所蔵の正保２年（1645）「津軽弘前城之絵図」には、本丸東側に「石垣ノ築掛三十八間」と記載されている（図

版６）。また、延宝５年（1677）「弘前惣御絵図」（弘前市立図書館所蔵）にも、本丸東側に「石垣ツキカケ」の箇所が描かれる。築城時、東側石垣の南端・北端では石垣を完成させていたが、中央部の「三十八間」については内濠水際付近まで石積みをし、それより上は土羽の状態であったと推定される。なお、現状でも下から３石目より下部は野面積石垣である。

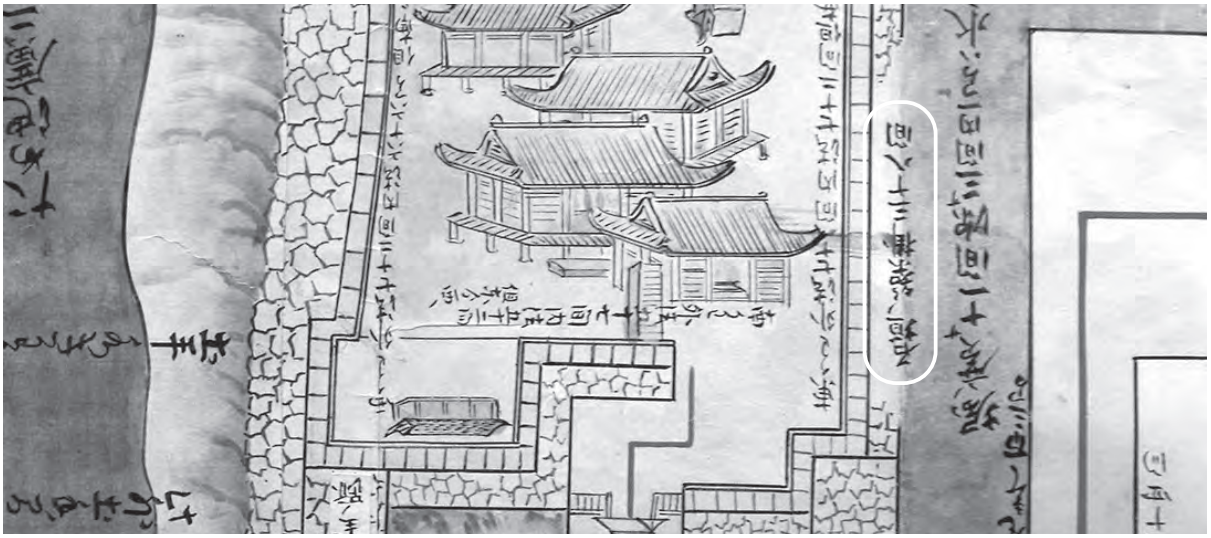
次期の石垣は、元禄年間に４代藩主・津軽信政によって積み足されたとされる、東側石垣中央部の石垣である。信政は、石垣築造をはじめ樋ノ口川の掘り替え工事や松の植栽、城の大手の変更（北門から追手門へ）、武家屋敷郭外移転（元禄９～10年（1696～97）・宝永２・６年（1705・1709））など、弘前城内の整備に力を入れた藩主であった。『弘前藩庁御国日記』によると、元禄７年（1694）５月に幕府から石垣築造の許可を得た弘前藩は、同年７月に起工式である「御鍬初」を催している。同年９月より本丸南西隅の未申櫓台から普請を始め、翌８年（1695）６月に本丸東側石垣の普請を本格化させる。『弘前藩庁御国日記』元禄８年（1695）５月18日条には、本丸未申櫓台石垣竣工に際し、「穴生」「手梃」「鳶」「石切」「牛遣」といった職人たちが褒美をもらったことが記述されている。しかし飢饉の影響により、８月には本丸東側石垣普請の中断を余儀なくされる。冷害による凶作が原因となった元禄８年の飢饉は、一説によると領内人口の３分の１が命を落とすほどの大惨事であったとされる（菊池1997）。その後、弘前藩は元禄12年（1699）３月に普請を再開、同年５月には終了し、ここに本丸を一巡する石垣が完成する。

当該期の石材については、『弘前藩庁御国日記』等によると、岩木山麓の如来瀬（弘前市）で採取したとされる。築城期に石材を採取した兼平の石切丁場と同じ岩木山麓であり、採取される石材はともに輝石安山岩である。平成23・25年度に、兼平・如来瀬の両石切丁場跡で採取された石材の偏光顕微鏡観察を実施しているが、それによると如来瀬石切丁場跡で採取される輝石安山岩には、黒雲母を含まない特徴があるとされる（弘前市都市環境部公園緑地課弘前城整備活用推進室2015）。

現状でも、本丸東側中央約70mの部分には、布積みの石垣が確認される。築石の面の形状は長方形状であるが、各所に間詰石が認められる。また、下から３石目までの野面積と、それより上の打込接・布積みの境界ラインは、現況では波打つような形状となっている（図版35）。

３期目の石垣として、天守再建に先立ち文化６年（1809）に改築された天守台石垣がある。築石の面は長方形状を呈し、合端に加工の施される「切石」となっているため、築石間に隙間が発生せず、間詰石も見られない。また、合端の加工により、築石の面は中央部が膨らむ「コブ出し」状となる。

天守台付近のかつての石積を伝える資料として、明治初期の古写真が残っている（図版７～14）。



図版６　津軽弘前城之絵図（本丸部分拡大）　正保２年（1645）弘前市立博物館所蔵

図版７　【明治５年(1872)】弘前市相馬家所蔵
武者屯御門と本丸の白土塀が写る。明治時代に崩落する前の、本来の石垣。北東から撮影。

図版８　【明治４～６年(1871～73)】弘前市立図書館所蔵(山上貢旧蔵写真)
武者屯御門と本丸の白土塀が写る。明治時代に崩落する前の、本来の石垣。東から撮影。

図版９　【明治時代初期】弘前市立博物館所蔵
本丸御殿と白土塀が写る。明治時代に崩落する前の、本来の石垣。南東から撮影。

図版 10　青森県生活環境部県民生活文化課県史編さんグループ提供
明治初期の弘前城天守と本丸御殿（青森県史編さん資料）

図版11　【明治時代初期】弘前市立博物館所蔵(西谷休之助撮影)
武者屯御門と本丸の白土塀が写る。明治時代に崩落する前の、本来の石垣。南東から撮影。

図版12　【明治５年(1872)】弘前市立博物館所蔵(西谷休之助撮影)
武者屯御門と本丸の白土塀が写る。明治時代に崩落する前の、本来の石垣。北東から撮影。

図版13　【明治時代初期】高照神社所蔵
武者屯御門と本丸の白土塀が写る。明治時代に崩落する前の、本来の石垣。北東から撮影。

図版14　【明治時代初期】阿保正義氏提供(Georgiana Baucus 1897『IN JOURNEYINGS OFT』に同じ写真あり)
武者屯御門と本丸の白土塀が写る。明治時代に崩落する前の、本来の石垣。南から撮影。

（２）弘前公園の整備と本丸東側石垣の修理

明治４年（1871）の廃藩置県により、弘前城は近世城郭としての役目を終えた。同年、弘前城は兵部省の管轄となり、本丸には東北鎮台第一分営が置かれた。明治６年（1873）の廃城令の際には、本丸御殿・武芸所等の建造物が取り壊されたが、城門や二の丸の櫓などについては旧態を残すことが許され、現在に至る。

明治 13 年（1880）、旧弘前藩士の内山覚弥が三の丸に 20 本の桜を植樹したのを契機に、城内への植樹が本格化する。明治 15 年（1882）には、同じく旧弘前藩士の菊池楯衛が二の丸を中心にソメイヨシノの苗木 1,000 本超を植樹、明治 36 年（1903）には再び内山が本丸・二の丸・四の丸一帯にソメイヨシノ 1,000 本を植樹し、弘前城跡の「桜の名所」としての側面が形成された。

明治 28 年（1895）５月、津軽家が実質的な管理者となり、弘前城跡は「弘前公園」として開放された。同 31 年（1898）、弘前への陸軍第八師団設置に伴い、三の丸に兵器支廠と陸軍火薬庫が造られたことにより、城跡は軍隊の拠点としての側面を強くする。同 35 年（1902）には津軽家より、弘前市に公園管理の権限が委譲された。同 42 年（1909）には陸軍省より弘前市に、三の丸を除く城域が払い下げられた。

上述のように、弘前城が近世城郭から公園・軍の拠点へと役割を変化させていく明治時代以降、弘前城跡本丸東側の石垣は２度の崩壊・修理を経ている。その経緯を記載した公文書・新聞記事を、表１にまとめた。以下に、表１の資料から読み取れる経緯について、簡潔に記述したい。

弘前公園が開園する前年の明治 27 年（1894）４月、天守台付近の石垣が崩落した。弘前市立図書館所蔵『旧城拝借ニ関スル書類綴』第１号（明治 26 ～ 32 年）中・明治 27 年４月６日付の文書には、この時に崩落について「…本丸東側石垣六七間程崩壊致之為メ同所巽隅櫓少シク傾斜致…」とある。同年５月７日には、第二師団監督部長から陸軍大臣へ「弘前城石垣修繕之件」と題した文書が発行され、設計書や図面などとともに修繕の予算執行の伺いが出された。その後、７月には第二師団監督部より「弘前舊城本丸内隅櫓及礎石下石垣修繕工事」の工事請負入札広告が出され（図版 17）、８月１日より 10 月 30 日までの期限で第二師団陸軍修築部が修築に着手、翌 28 年（1895）１月には竣工している。弘前市立図書館所蔵『明治廿七年甲旧城内公園設置願伺届書類』（TK-629-1）中に「弘前旧城本丸隅櫓下石垣及隅櫓揚方修繕工事設計書」が残っており、当時のものとして図版 15・16 が確認される。

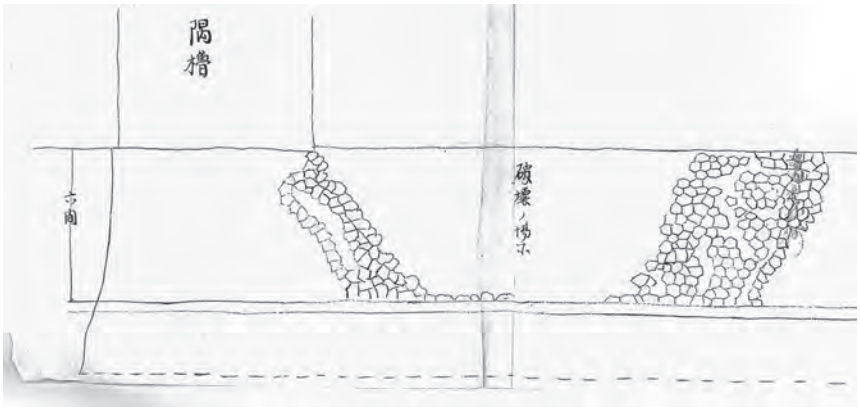
明治 29 年（1896）４月には、同 27 年の崩壊範囲より北側で本丸東側の石垣が崩壊している。弘前市立図書館所蔵『旧城拝借ニ関スル書類綴』第１号（明治 26 ～ 32 年）中・明治 29 年４月９日付の文書には「本丸天守閣石垣崩壊の図」が添付されており、この時の石垣崩壊状況を知ることができる（図版 18）。翌 30 年（1987）、前年の石垣崩壊を受け、弘前市出身の大工棟梁・堀江佐吉が、天守転覆を避けるために天守を本丸の内部へと曳家した。弘前市立図書館所蔵『旧城内公園設置願伺届書類甲』（明治 27 年 10 月）中には、この時の天守曳家に関わる文書が綴られている。この時の石垣崩壊に対しては、早急に積み直しといった対応がなされることはなく、大正４年（1915）まで静観されていたようである。明治 29 年の石垣崩壊状況や、曳家で移動した後の天守の様子は、当時撮影された写真に比較的多く確認することができる（図版 24 ～ 29）。

大正４年（1915）の石垣の修復完了と天守の曳き戻しについては、同年６～ 10 月の「弘前新聞」に記載されている。新聞記事からは、陸軍特別大演習に伴う大正天皇の 10 月来弘に合わせ、石垣の修復や天守の曳き戻し等、公園整備を急いだことが窺える。工事を担当したのは堀江彦三郎で、７～ 10 月という短期間のうちに石垣積み上げと天守の曳き戻しを終了させている。

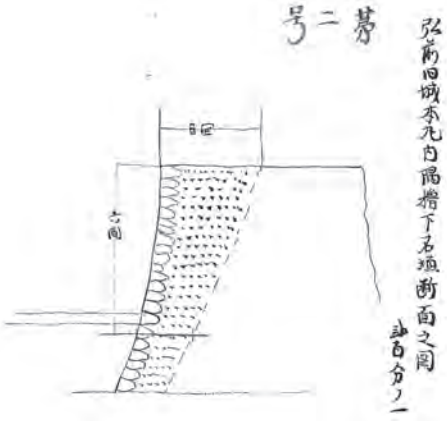
なお、平成 27 年度に実施した弘前城天守曳屋工事の際、天守土台を構成する角材の側面に、径約３㎝を測る円形の貫通穴が複数確認されている（弘前市都市環境部公園緑地課弘前城整備活用推進室 2016）。これらの穴には、明治～大正時代に実施された曳家の痕跡である可能性が考えられる（図版 20）。また、同じく平成 27 年度の工事では、土台底面に明治～大正時代の曳家でついた「キリン器械」の痕跡も確認されている（図版 21・吉村 1996）。

表１　弘前城跡本丸東側石垣　近代の石垣崩落と修理関係史料

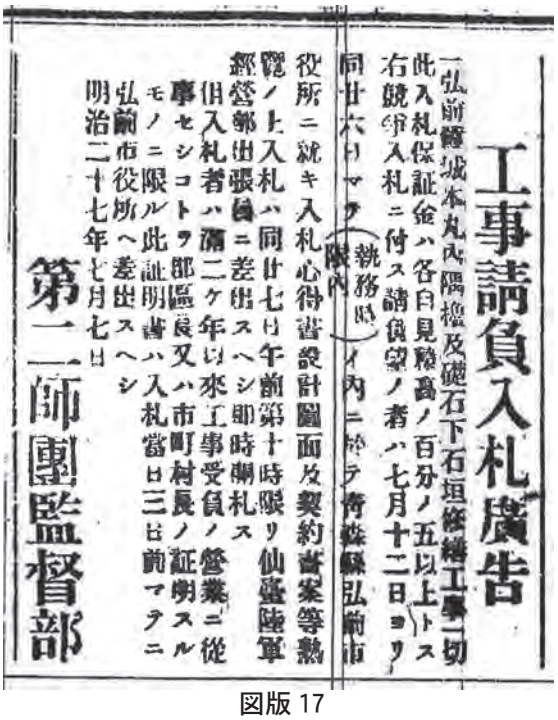
文書年号	月	日	文書名・内容	発行	受取	所蔵機関	関係史料
明治 27	4	6	「書按」…同城本丸東側石垣六七間程崩壊致之為メ同所巽隅櫓少シク傾斜致至急修築ニ着手不致候…	市長	内務部長	弘前市立図書館(KD629-１)「旧城拝借願ニ関スル書類綴第１号」明治 26-32 年	
明治 27	5	7	「弘前城石垣修繕之件」　弘前城石垣修繕之義ニ付伺　弘前城内石垣別紙図面之通客月二日俄然崩壊致候処右ハ本丸隅櫓礎石ニ連結セル石垣ナルヲ以テ其儘差置トキハ建物ニ大関係有之候ニ付此際修繕致度依テ該費用取調候処金千四百九十三円七十銭ヲ要スル見込ニ有之右ハ臨時ノ大修繕ニシテ本年度ニ於テ其費用ノ予算無之候得共難捨置破損ニ付本年度各所修繕費之内ヲ以テ支弁致置度候間特別ノ御詮議相成度別紙予算仕訳書設計書並図面相添此段相伺候也	第二師団監督部長 篠原国清	陸軍大臣伯爵大山巌	国立公文書館アジア歴史資料センター（レファレンスコード：C07050543700）	
明治 27	5	19	「案」…弘前城本丸東側石垣崩壊ノ儀ニ付…処頃々ノ遼雨ニテ倍ニ崩壊ノ景状ニ候…	市長	第二師団監督部長 篠原国清	弘前市立図書館(KD629-１)「旧城拝借願ニ関スル書類綴第１号」明治 26-32 年	
明治 27	7	10	工事請負入札廣告…弘前舊城本丸内隅櫓及礎石下石垣修繕工事…明治二十七年七月七日　第二師團監督部	東奥日報	—	—	図版 17
明治 27	7	13	工事請負入札廣告…弘前舊城本丸内隅櫓及礎石下石垣修繕工事…明治二十七年七月七日　第二師團監督部	東奥日報	—	—	
明治 27	9	5	弘前旧城本丸隅櫓下石垣及隅櫓揚方修繕工事設計書第一部…同櫓下石垣及隅櫓揚方修繕工事設計書第二部…	青森県内務部長 □坂平太	弘前市長 赤石行三	弘前市立図書館(TK-629-1)「明治二十七年十月ヨリ　甲　旧城内公園設置願伺届書類」	図版 15・16
明治 27	9	20	御願按…弘前旧城本丸石垣崩壊ノ場所去ル八月一日ヨリ来ル十月三十日マデノ期限ニテ第二師団陸軍修築部ニ於テ修築工事中…	市長	弘前警察署長	弘前市立図書館(KD629-１)「旧城拝借願ニ関スル書類綴第１号」明治 26-32 年	
明治 27	10	3	弘前旧城本丸石垣修繕工事ノ義ハ目下陸軍経営部ニ於テ修繕ニテ候…	—	—	弘前市立図書館(KD629-１)「旧城拝借願ニ関スル書類綴第１号」明治 26-32 年	
明治 28	1	7	「内二第六号」　弘前旧城石垣修繕工事竣功ニ付…	青森内務部長 島田宗正	弘前市長 赤石行三	弘前市立図書館(TK-629-1)「明治二十七年　旧城内公園設置願伺届書類」	図版 22・23 ？
明治 29	4	9	「旧城本丸石垣破壊ニ付御届」　昨八日午後五時旧城本丸天守閣東ノ方　土台石垣並北向土台石垣ノ内埋没　仕リ尚同閣東北隅ヨリ北ヘ拾間余　石垣破壊前紙絵図面ノ通ニ御座候…	公園管理者 須郷元雄	—	弘前市立図書館(KD629-１)「旧城拝借願ニ関スル書類綴第１号」明治 26-32 年	図版 18
明治 29	4	12	「旧城本丸石垣破壊ニ付御届」　去ル八日本丸石垣破壊ノ儀不取敢御届及候得共尚詳細左ニ申シ上候同日午後二時旧城監守人ヨリ御本丸隅櫓ノ下タ石垣ニ痛ミ相生ジ夫ニ接続ノ石垣張出シ候様ニ相見得候間見分致呉候様申出ニ付直様駈付見分之処申出ノ通隅櫓東北隅ノ石垣五六寸明キヲ　生ジ同ジク北向キ土台石垣ノ内六尺位之間石転動致壱尺以上空隙ノ所モ之レアリ又東向キ堀側石垣中程ヨリ下タノ方横ニ九間位ノ間稍々張出シ今ニモ破壊可致模様ニ相見得大心配致候モ施スベキ方法モ無之彼是致居候内同四時半頃終ニ破壊致申候然ルニ隅櫓ノ下タ甚敷破壊ニ相成転覆ノ患モ有之ニ付□中迄ニ角材等ニテ切立ヲ以テ手当仕置申候即破壊所之　絵図面相添此段及御届候也	弘前市公園管理者 須郷元雄	弘前市長 赤石行三	弘前市立図書館(KD629-１)「旧城拝借願ニ関スル書類綴第１号」明治 26-32年	
明治 29	4	13	「石垣崩壊ノ事ニ付キ御報告」　弘前公園地旧城本丸石垣本月八日崩壊之儀ニ御取扱九日附ヲ以テ及御報告候然ルニ右崩壊ニ係リタル原因詳細取調難相成候得共公園管理者ヨリ報告ト其ノ状況トヲ考エルニ去ル二七年崩壊セシ場所以北ヨリ崩壊ノ形状ヲ呈シタルヲ以テ考フル中一昨二七年崩壊セシ以前ニ於テ隅櫓下石垣ニ既ニ緩ミヲ生シ為ニ地中ニ隙間ヲナシタルモノト考エラレ候故ニ二七年中修繕ノ場所以外ヨリ起リ漸次修繕ノ場所ニ及ボシタルモノニ考エ候尚又昨年ハ近来稀ナル大雪ニシテ之ガ融解ノ時季ニ際シ水分隙間ノ場所ニ湛エタル為膨脹遂ニ崩壊トナリタルモノト推考スルヨリ、他無之地震同様ノ破損ニテ有之候併之隅櫓転覆ノ憂無候様即□充分手当致置候間前紙絵図面相添再度御座及御報告候也	市長	知事	弘前市立図書館(KD629-１)「旧城拝借願ニ関スル書類綴第１号」明治 26-32年	
明治 29	9	—	「弘前旧城内本丸隅櫓払イ下ノ義ニ付願」　弘前旧城内本丸第壱号隅櫓土台石垣崩壊ノ義ハ予テ本県知事ヘ報告ニ及置候義ニ有之然ルニ□崩壊ニ係ル個所ニ付テハ当時直ニ数十ノ真梁棒等ヲ相用ヒ僅ニ隅櫓転覆防御致居候得共建物重量　ノ莫大ナルタメ漸次石垣前面モ膨張致随テ隅櫓傾斜ノ度ヲ高メ始ント転覆セントスルノ危機ニ差迫リタル実況ニ候得者秋冬ノ候ニ際シ霖雨降雪相続キ地盤相緩ミ候暁ニハ南東ヨリ北方ニ至ル前面一体ノ石垣全部陥潰致隅櫓転覆ハ必然ノ事ト被考候ニ付今ニシテ之ガ修繕若クハ移転等相当ノ手当ヲ不致候テハ現在ノ壮観ヲ失フノミナラズ公園唯一ノ建物ヲ徒ニ毀損セシムルハ遺憾ノ至リニ不堪候間別紙絵図面之通城門本丸南方ノ一隅ヘ移転致永遠ニ保存ノ上公園ノ美観ヲ保維致度尤右移転ニ付テハ巨額ノ工事費ヲ要スル義ニ付特別ノ御詮議ヲ以テ□隅櫓無代価御払下御許可被成下度本市会ノ決議ヲ経此段奉願候也	弘前市参事会 弘前市長 赤石行三	陸軍大臣 大山巌	弘前市立図書館(TK629-１)「旧城内公園設置願伺届書類甲」明治 27 年 10 月	
明治 29	11	4	「弘前旧城内本丸隅櫓払イ下ノ義ニ付願」　弘前旧城内本丸　一　第壱号隅櫓　一棟　以払下代金五十円隅櫓土台右石垣崩壊ノタメ転覆セントスルノ危機ニ差迫リ候故城　内南方ノ一隅ヘ移転致シ之カ急ヲ支ヘンカタメ去八月四日付ヲ以　テ払イ下出願ニ及ビ候…	青森県弘前市参事会 弘前市助役 関静	陸軍　臣子爵高橋鞆之助殿	弘前市立図書館(KD629-１)「旧城拝借願ニ関スル書類綴第１号」明治 26-32 年	
明治 29	11	27	七二〇〇号　「弘前城隅櫓払下ノ件」　願之趣聞届ク但払下代価納付方及移転跡復旧工事ニ就テハ第二師団監督部ノ指示ヲ受クベシ	陸軍大臣	青森県参事会	弘前市立図書館(KD629-１)「旧城拝借願ニ関スル書類綴第１号」明治 26-32 年	
明治 29	12	7	「御届」　旧城本丸隅櫓有価御払下許可相成候ニ付他所ヨリ引移保存支度候間請負人堀江佐吉ニ申付候処明八日ヨリ向フ日数三〇日ノ見込ヲ以テ引移可申積ニ御座候此段及御届候也	弘前市公園管理者 須郷元雄	弘前市参事会 弘前市長 長尾義連	弘前市立図書館(KD629-１)「旧城拝借願ニ関スル書類綴第１号」明治 26-32 年	
明治 30	6	12	弘前旧城本丸櫓移転□に付地鎮祭之為来る十四日同所に於いて神楽執行仕候間此の段及びお届け候也	弘前公園管理者 浜口元雄	弘前市参事会 弘前市長 長尾義連	弘前市立図書館(TK629-１)「旧城内公園設置願伺届書類甲」明治 27 年 10 月	図版 24 ～ 29
大正４	6	29	「弘前市會議案」石垣積立及天守閣移轉費金八千八百八圓五拾錢五厘…大正四年六月廿六日提出…	弘前新聞	—	—	
大正４	7	1	公園改築工事入札　公園本丸石垣改築（長さ四十三間）本丸隅櫓移轉（一棟）…	弘前新聞	—	—	図版 19
大正４	7	4	「公園修築の価値」…市の豫算では僅かに八千圓より計上して居らぬが八千圓で完全な者が出來るや否やは疑問である、理事者の説明では充分専門家の調査を遂げ大丈夫根石が動いて居らぬと云ふて居るとの事だが嘗て工兵隊で調査した時に根石は動いて居ると云ふ事を確かめたので之が根本的の積直しは莫大の費用を要すると云ふので放棄した事實はある、夫れは濠の水が涸れた爲めに根石を乗せて居る算盤木が全部腐蝕して居るとの事だ…	弘前新聞	—	—	
大正４	7	5	「公園修築工事入札　石垣修築と外壕浚渫」清水村堀江彦三郎氏に指名入札と成り…九千七百三十圓	弘前新聞	—	—	
大正４	7	7	「公園石垣隅櫓工程」弘前公園石垣改築及隅櫓（天守閣）移轉工事は過日より着手中なるが工程は左の如し…石垣改築　割栗石目潰砂利輸入…在來石垣解除運搬…石材加工及び疊土…在來裏込及土砂堀取除運…裏込及土砂運搬埋戻搗固共…	弘前新聞	—	—	図版 30
大正４	7	28	「公園石垣に就て　竹内市事業係長談」公園天守閣前の崩潰した石垣を修繕する以前には基石に大材木を使用して居るとか立派な基石が有るとか又は有つても至つて瞬昧な物だとかとて紛議□々で吾々も工事に着手するに躊躇した次第だが一昨日から昨日にかけて吾々の疑惑を解かんが爲めに其實状を明細に檢査したら矢張り之が基石で有ると何人にも一見了解し得る者がなかつたので愈々不審の念に堪えなかつたから更に手段を變へて調査すると成程吾々が想像した様な基石がないのが道理で有る、其れは水面下四尺位一帶の地盤は非常に強固で恰かも岩石の如くてある而して此四尺位の深さ有る部分には巨大な石を不秩序に澤山埋沈して居つて之が所謂基石の代用と成つて居るので有る…如何なる原因が手傳つて屢崩潰の破目に陷つた者て有るか…其根本原因を確めたので有る、其れは裏込石に接して居る土が幾條も龜裂有る軟弱な粘層で有るのと今一は設計の原則に相違して居る粗雑な裏込石が有る事で有る、此粘層に澤山の龜裂を生じたのは學理から推究すると地震に依つて發生した者だ相で降雨有る度毎に雨水が其龜裂に侵入して粘土を益々脆軟ならしめたから遂に其重量に堪え切れずして陥落したのが之を支持する効力がない裏込石を激しく壓迫したので直に外部の石垣に影響を及ぼし斯くて其度數を重ねるに從つた果ては潰崩の余儀なきに至つた者で有るから今回の修繕工事には該龜裂部分を悉皆除去し裏込石を出來得る限り稠密ならしめ各積石の間にはコンクリートを充分に塗布して其連繋を完全ならしめ所謂大典紀念事業として永却崩潰せない様に改築しやうと思うて居る…	弘前新聞	—	—	
大正４	10	13	「秋晴の鷹揚園　修築後の弘前公園」…本年は大演習を扣へて居るので畏くも聖上陛下御幸の爲め弘前市會は二万數千圓を費して崩れて居る石垣は勿論、隅矢倉の移轉から四阿の設置、道路から濠の浚渫迄一生態（ママ）命心血を注いだ…	弘前新聞	—	—	
大正４	10	14	「秋晴の鷹揚園（二）　修築後の弘前公園」…本丸の崩れた石垣は悉く積み直され隅矢倉も昔の位置に移され、ただ足代許りが工事の名殘を止めて居るかの様に思はれた。公園修築の半分以上は此隅矢倉の移轉と石垣の積み直すに費されたのであるが最初の豫算は両方で一萬圓足らず、然し石垣の根石が動いて居つた爲めに基礎工を施す費用は別に掲上した積りであるから實際は一萬圓以上を要して居る。之れは中々の難工事であつたが青葉吹く薫風の頃から起工し僅か四ヶ月足らずの短い日數で竣工したのは流石に見上げた者だ…	弘前新聞	—	—	
昭和 11	11	-	○本丸東方の石垣崩る 明治二十九年四月八日午后四時頃、本丸東方の石垣崩ること十四五間。 是より先、明治二十七年二月十日より十三日迄尓渉り強地震ありしが其れより後十日も経ざる尓（殆ど雪消の後）天守閣土台際かけて北方へ十二三間の間、石垣（乱積の分）但し天主閣の土台、東北の隅は西方へかけて石三ケ崩れたり。　閣東方へ傾くこと一尺斗り也し、其の秋迄尓修理せり（閣を西方の石垣の上迄引移し）、其時の請負技師ハ旧建築を笑ひつつ、此度は石垣の石一つ毎尓其の根尻へ中小取交ぜ、石を積入れだから大丈夫なりとせり、然る尓此度未だ二ケ年も経ざる尓右の失敗なり、尤も今度の崩壊の主点は閣の下の石垣より発せしが如しと也。	中村良之進	—	弘前市立図書館（YK091-１-５-12）中村良之進「艸紙十二」	



図版 15　明治 27 年（1894）
「弘前旧城本丸内隅櫓下石垣　前面之図」
弘前市立図書館所蔵

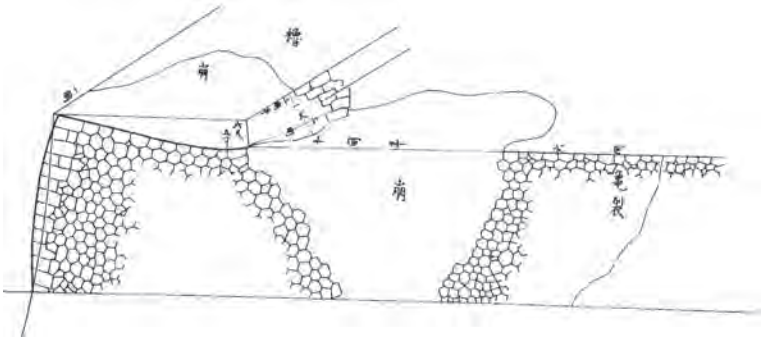


図版 16　明治 27 年（1894）
「弘前旧城本丸内隅櫓下石垣断面之図」
弘前市立図書館所蔵

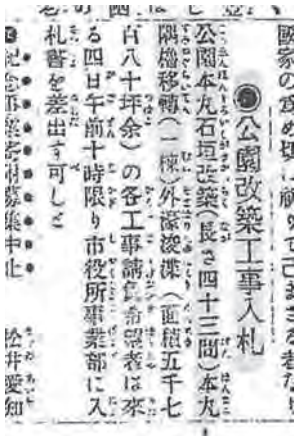

工事請負入札廣告

一弘前舊城本丸内隅櫓及礎石下石垣修繕工事一切
此入札保証金ハ各自見積高ノ百分ノ五以上トス
右競爭入札ニ付ス請負望ノ者ハ七月十二日ヨリ
同廿六日マテ（執務時限内）ノ内ニ於テ青森縣弘前市
役所ニ就キ入札心得書設計圖面及契約書案等熟
覽ノ上入札ハ同廿七日午前第十時限リ仙臺陸軍
經營部出張員ニ差出スヘシ即時開札ス
但入札者ハ滿二ヶ年以來工事受負ノ營業ニ從
事セシコトヲ郡區長又ハ市町村長ノ証明スル
モノニ限ル此証明書ハ入札當日三日前マテニ
弘前市役所ヘ差出スヘシ
明治二十七年七月七日
第一二師團監督部

図版 17
明治 27 年（1894）7 月 10 日付「東奥日報」



図版 18　明治 29 年（1896）「本丸天守閣石垣崩壊之図」
弘前市立図書館所蔵


◉公園改築工事入札
公園本丸石垣改築（長さ四十三間）本丸
隅櫓移轉（一棟）外濠浚渫（面積五千七
百八十坪余）の各工事請負希望者は來
る四日午前十時限り市役所事業部に入
札書を差出す可しと

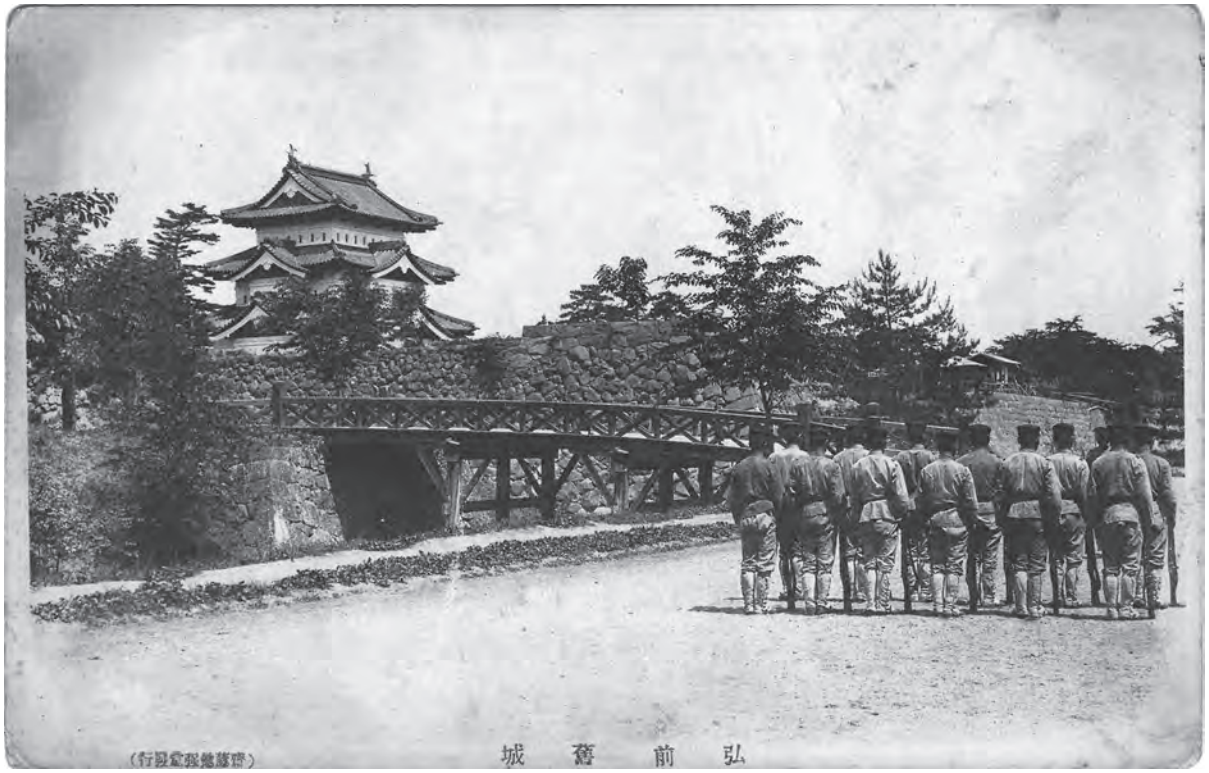
図版 19
大正 4 年（1915）7 月 1 日付
「弘前新聞」

図版20　天守土台角材の側面に入る貫通穴
（天守土台中央付近）西から

図版 21　天守土台下面についた「キリン器械」
の痕跡

図版22　【明治27～29年(1894～1896)か】『平成22年度弘前城本丸石垣カルテ作成業務成果品①』より引用
明治27年(1984)の石垣崩壊・修理後の写真か。北東から撮影。

図版23　【明治27～29年(1894～1896)か】弘前市都市環境部公園緑地課所蔵
明治時代中頃の絵葉書とされる。明治27年(1984)の石垣崩壊・修理後の写真か。南東から撮影。



図版24　【明治30年～大正4年(1897～1915)】青森県立郷土館所蔵
絵葉書「弘前旧城」(斎藤勉強堂発行)

図版25　【明治30～35年(1897～1902)】光村寫眞部1902『仁山智水帖』より引用
明治29年(1896)石垣崩壊を受け、翌30年(1897)に天守が曳家された後に撮影されたもの。南東から撮影。

図版26　【明治30年～大正４年(1897～1915)】函館市中央図書館所蔵
明治29年(1896)石垣崩壊を受け、翌30年(1897)に天守が曳家された後に撮影されたもの。南東から撮影。

図版27　【明治30年～大正４年(1897～1915)】弘前市立博物館所蔵
明治29年(1896)石垣崩壊を受け、翌30年(1897)に天守が曳家された後に撮影されたもの。東から撮影。

図版28　【明治 41 年(1908)】弘前市立博物館所蔵
明治29年(1896)石垣崩壊を受け、翌30年(1897)に天守が曳家された後に撮影されたもの。東から撮影。

図版29　【明治30年～大正元年(1897～1912)】弘前市都市環境部公園緑地課所蔵
明治29年(1896)石垣崩壊を受け、翌30年(1897)に天守が曳家された後に撮影されたもの。東から撮影。

図版30　【大正４年(1915)】弘前市経営戦略部広聴広報課所蔵
大正４年(1915)の石垣修理状況。東から撮影。

図版31　【昭和19年(1944)】弘前市立図書館所蔵
明治42年(1909)建立の為信銅像が、太平洋戦争下の金属回収令で徴収される際の写真。西から撮影。

３．地理的環境

弘前市は、本州最北端・青森県の南西部に位置する。市域の東部から南部にかけては、南津軽郡藤崎町・田舎館村・大鰐町及び平川市に、西部は西津軽郡鰺ヶ沢町及び中津軽郡西目屋村に、北部はつがる市及び北津軽郡鶴田町・板柳町に接している。弘前市の人口は約 17 万５千人であり、弘前藩成立以来、津軽地域の中心都市としての役割を担っている。市街地には近世の面影が残り、城下町特有の情緒を醸し出している。

青森県西部には、広大な沖積地である「津軽平野」が広がっており、弘前市の位置はその平野の南西部に相当する。地形は、東側を奥羽脊梁山地、西側を標高 1,625mの岩木山、南側を世界自然遺産・白神山地に囲まれる盆地状であり、平野中央部を岩木川が北流する（弘前市教育委員会 2014）。岩木川は白神山地を水源とし、同じく白神山地から流れる平川や浅瀬石川等の支流と合流して津軽平野を形成し、十三湖に入り日本海に注ぐ。

弘前市街地は洪積台地の末端部に展開しており、標高約 120mから北へ緩やかに傾斜し、北部の和徳付近で標高 25 ～ 30mとなる。東部では、標高 20m以下の低平な地域となる（公益財団法人文化財建造物保存技術協会 2011a）。

弘前城跡の周辺地形は、大きく台地と低地に区分される。台地は「弘前台地（Ⅲb）」と称され、「目屋丘陵（Ⅱa）」や、低地である「岩木川谷底平野（Ⅳb）」との間に分布する（公益財団法人文化財建造物保存技術協会 2011a）。

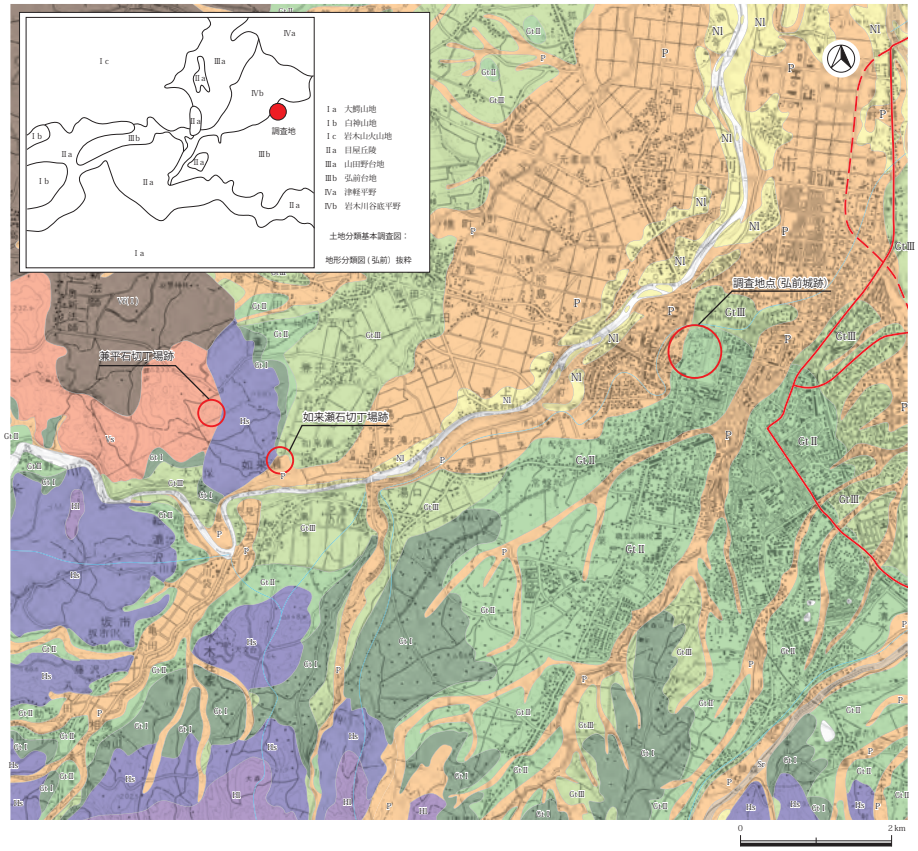
弘前台地は、GtⅠ、GtⅡ、GtⅢの３つの地形面に細分される（図版 32）。GtⅠ面は弘前市街地南方の笹森山（標高 106.3m）付近を模式地とする地形面で、標高は約 90 ～ 140mを測る。GtⅡ面は標高約 40 ～ 60mを測る地形面であり、上位の GtⅠ面とは傾斜変換部で、下位の GtⅢ面とは約１mの段丘崖によって区分される。GtⅢ面は、谷底平野と約３～５mの段丘崖によって区分される。弘前台地上には、現在弘前市街地が広がっており、弘前城跡の位置は台地縁部の GtⅡ面に相当する。

低地は、「岩木川谷底平野（Ⅳb）」と称される。岩木川・相馬川沿いに分布する扇状地性の低地を差し、弘前城跡の西方～北方に相当する。

弘前城跡周辺の地質は、新第三紀中新世の大和沢層～鮮新世の東目屋層を基盤とし、上位には第四紀更新世の段丘扇状地堆積物、山田野層、泥流堆積物及び完新世の沖積低地堆積物が分布する（図版 33）。弘前城跡は弘前台地に当たり、台地を構成する地質は第四紀更新世の泥流堆積物が主体となる（公益財団法人文化財建造物保存技術協会 2011a）。

なお、図版 32・33 については、過去に刊行した『史跡津軽氏城跡弘前城本丸石垣発掘調査報告書』及び『史跡津軽氏城跡（弘前城跡）弘前城本丸南馬出し石段（武者屯坂）発掘調査報告書』中にＡ３版のより鮮明なものが掲載されているので、そちらもご参照願いたい（ 弘前市教育委員会 2013・弘前市都市環境部公園緑地課弘前城整備活用推進室 2014a）。

弘前城跡は弘前市の南東側にあり、岩木川の右岸段丘上の標高 46m～段丘下の標高 29m地点に立地する。本丸・北の郭・二の丸・三の丸が段丘上に、四の丸・西の郭が段丘下に当たり、段丘の境には二階堰が流れる。二階堰は、岩木川東岸に広がる水田の幹線用水路となっており、文禄３年（1594）に開削されたと伝えられる（弘前市教育委員会 2011）。各郭の標高は、本丸で約 46m、北の郭で約 38m、二の丸で約 37 ～ 42m、三の丸で約 36 ～ 44m、四の丸で約 29m、西の郭で約 30mを測り、本丸が最も高く、四の丸が最も低い（弘前市教育委員会 2009）。その一方で、本丸の南方約 500m地点に位置する弘前市役所付近の標高は約 44mであり、本丸の標高とそれほど大差はない（弘前市・弘前市教育委員会・史跡弘前城跡三の丸庭園発掘調査団 1984・（Ⅰ））。



凡　例　LEGEND

山地　MOUNTAINS

- Ml　大起伏山地 Larger relief mountains
- Mm　中起伏山地 Middle relief mountains
- Ms　小起伏山地 Smaller relief mountains
- VL　大起伏火山地 Larger relief volcanic mountains
- Vm　中起伏火山地 Middle relief volcanic mountains
- Vs　小起伏火山地 Smaller relief volcanic mountains
- Vf(Ⅰ)　火山麓地 Volcanos' foots

丘陵地　HILL LANDS

- Hl　丘陵地（Ⅰ） Larger relief hill lands
- Hs　丘陵地（Ⅱ） Smaller relief hill lands

台地　UPLANDS

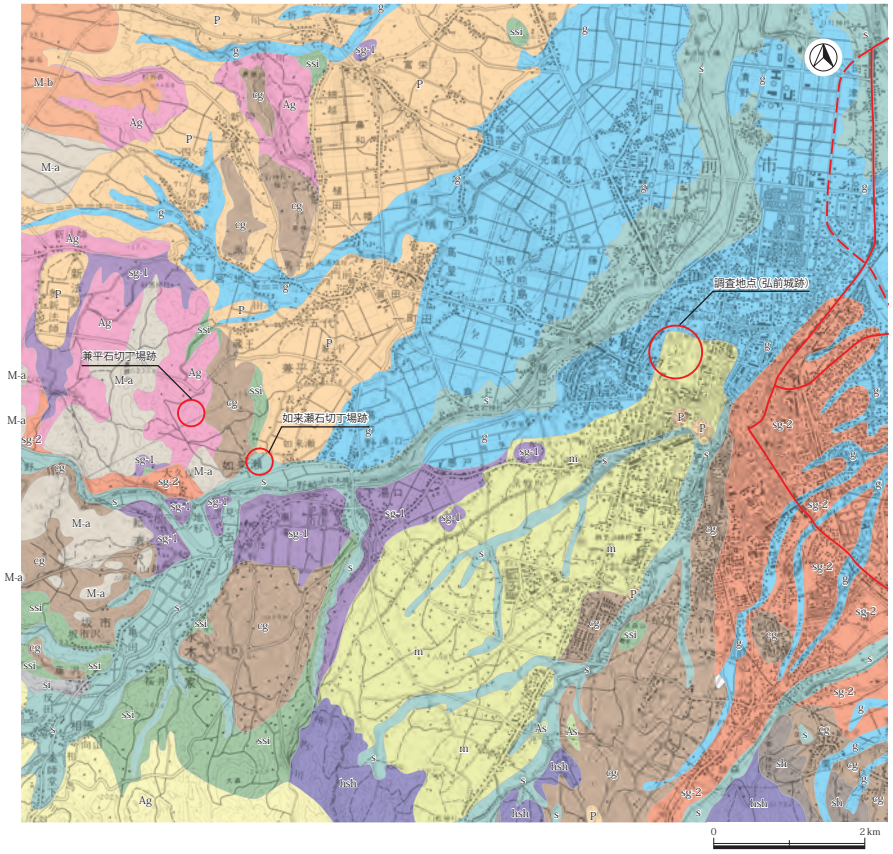
- Gt Ⅰ　砂礫台地Ⅰ Gravel terrace Ⅰ
- Gt Ⅱ　砂礫台地Ⅱ Gravel terrace Ⅱ
- Gt Ⅲ　砂礫台地Ⅲ Gravel terrace Ⅲ

低地　LOWLANDS

- P　谷底平野 Valley plains
- F　扇状地 Allvial fans
- Nl　自然堤防 Natural levees
- Sr　河原 Snadbank

図版32　地形分類図（青森県：土地分類基本調査－弘前－）

弘前市教育委員会2013『史跡津軽氏城跡弘前城本丸石垣発掘調査報告書』より引用



凡　例　LEGEND

未固結堆積物 Unconsolidated sediments（第四紀 Quaternary）

- s　砂がち堆積物 Sand-rich sendiments
- g　礫がち堆積物 Gravel-rich sendiments
  - 沖積低地堆積物 Alluvial lowland sediments
- sg-1　砂および礫（1） Sand and gravel
- sg-2　砂および礫（2） Sand and gravel
- sg-3　砂および礫（3） Sand and gravel
  - 段丘扇状地堆積物 Terrace fan sendiments
- m　泥流 Mud flow
- cg　粘土礫 Clay and gravel　山田野層 Yamadano formation
- sc　砂および粘土 Sand and clay　前田野目層 Maedanome formation

固結堆積物 Consolidated sediments（鮮新世 Pliocene／中新世 Miocene／先第三紀 Pre-Tertiary）

- ssi　砂岩および砂質シルト岩 Sandatone and sandy siltstone　東目屋層 Higashimeya formation
- si　シルト岩 Siltstone　大秋層 Taiaki formation
- Pt　浮石質凝灰岩 Pumiceous tuff　田代凝灰岩部類 Tashiro tuff member
- sh　黒色頁岩 Black shale　松木平層 Matsukitai formation
- Ag　安山岩質集塊岩 Andesitic agglomerate　相馬安山岩質集塊岩類 Soma andestic aggomerate
- hsh　硬質頁岩 Hard shale　大和沢層 Owasawa formation
- ss　砂岩および砂質凝灰岩 Sandstone and sandy tuff　砂子瀬層 Sunakose formation
- Rt　流紋岩質凝灰岩 Rhyolitic tuff　藤倉川層 Fujikuragawa formation
- At　安山岩質凝灰岩 Andestic tuff　尻高山沢層 Shiritakayamazawa formation
- cg　礫岩 Conglomerate　基底礫岩 Besal conglomerate
- ch　珪岩および粘板岩 Chort and slate

新期火山噴出物 new-volcanic products（岩木火山噴出物 Iwaki San Volcanic products）

- As　火山灰 Ash
- P　浮石流堆積物 Pumice flow sediments
- M-a　火山泥流（a） Volcanic mud flow（a）
- M-b　火山泥流（b） Volcanic mud flow（b）
- M-c　火山泥流（c） Volcanic mud flow（c）
- Ag　火山細角礫岩および火山角礫岩 Lapilli tuff and volcanic breccia
- Ab-a　安山岩熔岩（A） Andesite lava　中央火山丘　寄生火山熔岩 Centralcone and parasitic lava
- Ab-b　安山岩熔岩（B） Andesite lava　外輪山熔岩 Somma lava

火山性岩石 Volcanic rocks（第三紀 Tertiary）

- Ry　流紋岩 Rhyolite
- An-1　安山岩（1） Andesite（1）
- An-b　安山岩（2） Andesite（2）

深成岩 Plutonic rocks（第三紀 Tertiary）

- Gr　花崗岩質岩石 Granitic rocks

図版33　表層地質図（青森県：土地分類基本調査－弘前－）

弘前市教育委員会2013『史跡津軽氏城跡弘前城本丸石垣発掘調査報告書』より引用

４．歴史的環境

弘前市内においては、平成 29 年（2017）３月 31 日時点で 454 ヵ所の遺跡が登録されている（弘前市教育委員会文化財課 2017）。そのうち、弘前城跡（遺跡番号：74）の周辺に所在するものを図版 34 に示す。

弘前市における人間活動の痕跡は、旧石器時代から確認される。具体例として、掻器１点が採集された大沢遺跡、発掘調査でナイフ形石器等 11 点が出土した大森勝山遺跡（７）がある（弘前市教育委員会 2014）。

縄文時代草創期・早期に該当する遺構は未確認であり、市内では少量の土器が出土しているのみである。前期の遺跡の調査事例には、円筒下層 b 式期の竪穴住居跡２棟とフラスコ状土坑９基が発見された尾上山（３）遺跡（207）、前期後葉～中期前半を主体とする多数のフラスコ状土坑が発見された笹森館遺跡（98）などがある。中期以降の遺跡としては、松本遺跡（380）で中期末葉の土器囲炉を検出しているほか、独狐七面山遺跡（18）で中期の高床式倉庫と考えられる掘立柱建物跡２棟を、油伝（２）遺跡（250）で中期～晩期の遺物を確認している（弘前市教育委員会 2014）。

弥生時代の遺跡としては、砂沢遺跡（13）が著名である。水田跡、捨て場、土坑４基、土器埋設遺構１基などが確認されており、中でも水田跡は、弥生時代のものとしては日本最北の発見である。そのほか、宇田野（２）遺跡（221）では前期（砂沢式期）の土坑墓５基が、中崎館遺跡（67）では前期（二枚橋式・五所式）の土器や遠賀川式系土器のほか、竪穴遺構が１基確認されている（弘前市教育委員会 2014）。

古墳時代の遺物・遺構の発見は、青森県全体を視野に入れても少ない傾向にある。津軽地方では遺物が散発的に出土するのみであり、遺構の発見には至っていない。市内では、一ノ下り山遺跡から大型壺とともに後北Ｃ２・Ｄ式土器に比定される続縄文土器が出土している（弘前市教育委員会 2014）。

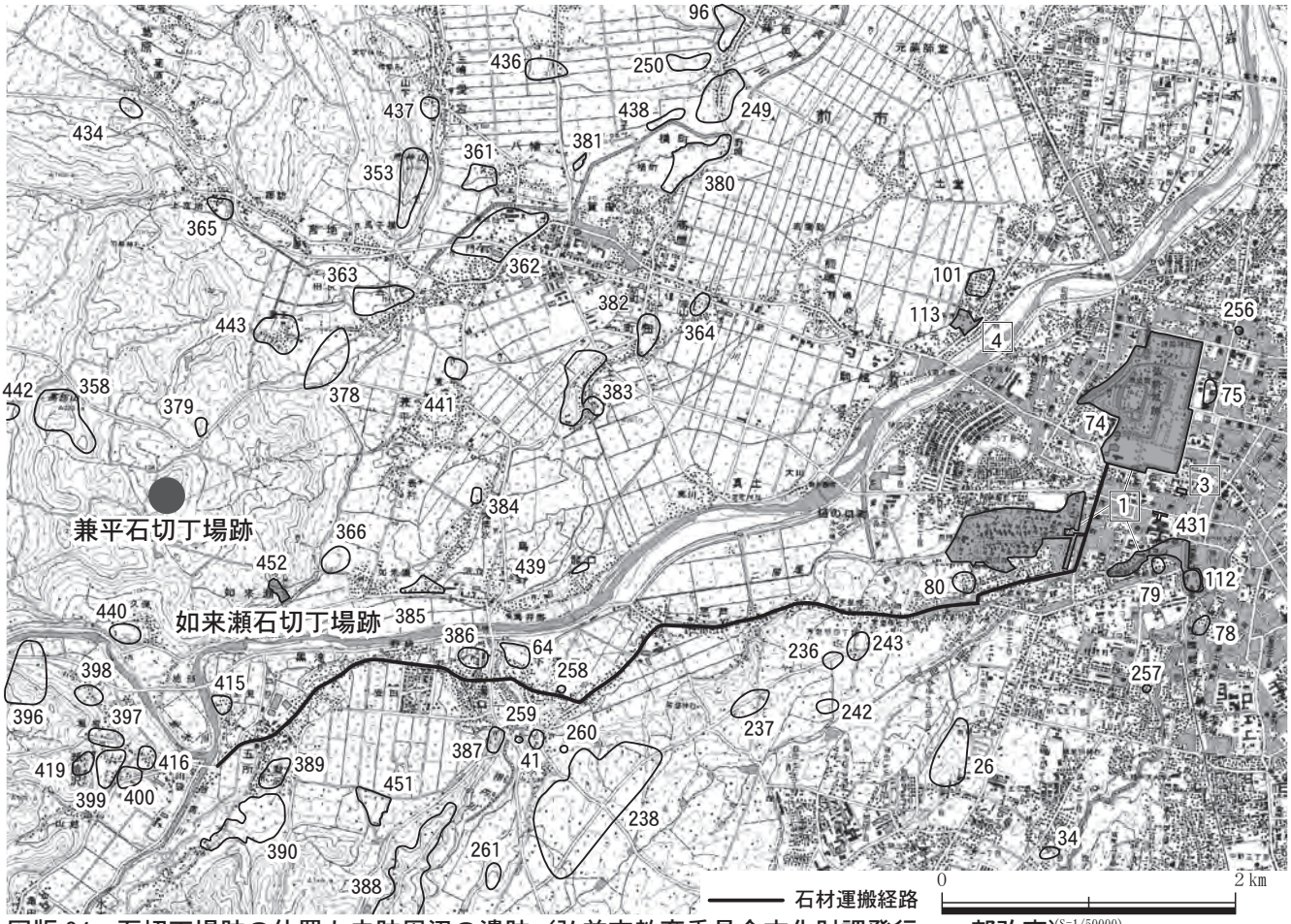
津軽地方における７～８世紀の遺跡は少なく、浅瀬石川・平川流域にわずかに見られる程度である。市内では、笹森館遺跡（98）で８世紀後半の土器がまとまって出土している。９世紀後葉～ 10 世紀前葉になると集落数が急激に増加し、10 世紀後葉から 11 世紀前葉にかけては、東北地方北部で盛行する「環壕集落」が見られるようになる。その後 11 世紀後半になると、遺跡数は少なくなる（弘前市教育委員会 2014）。

中世の遺構・遺物は、発掘調査により 12 世紀後半以降のものが確認されている（弘前市教育委員会 2014）。大浦城跡（362）は文亀２年（1502）、南部光信によって築城された。以来約 90 年間、光信の子孫・大浦氏の居城として機能し、後に大浦為信による津軽統一の拠点にもなった城である。発掘調査では、15 世紀末～ 16 世紀前半を中心とした陶磁器が出土している（弘前市教育委員会 2014）。

弘前城跡周辺の近世遺跡としては、蔵主町遺跡がある（75）。蔵主町遺跡は、弘前城跡のすぐ東側に所在する縄文時代から近世にかけての複合遺跡であり、平成 24 年（2012）の発掘調査において城下の町割の痕跡が確認されている（青森県教育委員会 2014）。また、同じ城下町遺跡として城下町本町遺跡（431）がある。

如来瀬石切丁場跡（452）は、元禄７～ 12 年の弘前城本丸東側石垣の築き足しの際、石材の供給源となった遺跡である。平成 23・24 年（2011・2012）、弘前城本丸石垣修理事業の一環として現況調査が実施され、その成果を受けて遺跡として登録された（弘前市都市環境部公園緑地課弘前城整備活用推進室 2015）。如来瀬石切丁場跡の北西には、兼平石切丁場跡が所在する。こちらは遺跡として未登録だが、築城時に石材を採取した場所として知られる。こちらの石切丁場跡でも平成 24 年（2012）に現況調査が行われており、近現代まで採石を行っていた痕跡が確認されている（弘前市教育委員会 2013）。

その他、遺跡として登録されたものではないが、市内銅屋町の金剛山最勝院境内には、元禄８年（1695）の本丸旧天守台石垣修築の際に発見された「不動明王の梵字石」が現存する（弘前市都市環境部公園緑地課弘前城整備活用推進室 2015・2016）。また、今回の弘前城本丸東側石垣に係る発掘調査範囲には、長く石製（石質：デイサイト）の井戸枠が設置されていた（弘前市都市環境部公園緑地課弘前城整備活用推進室 2015・2016）。この井戸枠については、昭和初年（1926）頃まで機能していた井戸に伴うものであったことが古写真から把握されていたが、古くはいつまで遡るのか不明であった。平成 29 年（2017）の石垣解体調査で、近世と思われる井戸遺構が確認されたことにより（詳細については後述）、本井戸枠の制作時期は近現代である可能性が高くなったが、本井戸枠に類似する石製井戸枠を１点、弘前市大字賀田の民家敷地内に確認している（平成 27 年（2015）・岡本康嗣確認）。



図版 34　石切丁場跡の位置と史跡周辺の遺跡（弘前市教育委員会文化財課発行、一部改変）

1 は史跡津軽氏城跡弘前城跡、3 は吉田松陰来遊の地、4 は曹洞宗津軽山革秀寺。

表 2　史跡周辺の遺跡

番号	名称	所在	現況	種別	時代
1	沢部 (1) 遺跡	小栗山字沢部 225 の 71 外	山林・畑	包蔵地・集落跡	縄文・弥生・平安
3	天王沢遺跡	小栗山字沢部 226 の 58 外	畑	包蔵地	縄文
4	桜山遺跡	糠坪字桜山	畑・田	包蔵地	縄文・平安
26	若葉遺跡	若葉 1･2 丁目	畑	包蔵地	縄文・平安
34	旭ケ丘遺跡	旭ケ丘 2 丁目	宅地・畑	包蔵地	平安
41	野際遺跡	下湯口字野際	畑	包蔵地	縄文
64	青柳館遺跡	下湯口字青柳 59 の 9	宅地・畑	城館跡	平安
74	弘前城跡	下白銀町、西茂森 1･2 丁目、南瑞町、桶屋町、銅屋町	公園・寺院・宅地	城館跡	縄文・平安・江戸
75	蔵主町遺跡	蔵主町	宅地	包蔵地	縄文～江戸
78	紙漉町遺跡	紙漉町	宅地	包蔵地	縄文
79	新寺町遺跡	新寺町	境内	包蔵地	縄文
80	西茂森遺跡	西茂森	境内	包蔵地	平安
96	蒔苗館	蒔苗字野田外	畑・宅地	城館跡・散布地	平安・中世
101	藤代館	藤代 1 丁目	宅地・畑	城館跡	歴史
112	出間館	銅屋町	境内	城館跡	縄文・平安安土桃山・江戸
113	津軽山革秀寺庭園遺跡	藤代 1 丁目 4 の 1	寺院	庭園	江戸
236	寺沢 (1) 遺跡	清水富田字寺沢、常盤坂 4 丁目	畑	散布地	平安
237	中野 (1) 遺跡	悪戸字中野	畑	散布地	平安
238	中野 (2) 遺跡	悪戸字中野、下湯口字村元・扇田	畑	包蔵地・集落跡	平安
242	寺沢 (2) 遺跡	清水富田字寺沢	畑	散布地	縄文・平安
243	常盤坂遺跡	常盤坂 1･4 丁目	畑・宅地	散布地	縄文・平安
249	油伝 (1) 遺跡	蒔苗字油伝	畑・宅地	散布地	平安・中世
250	油伝 (2) 遺跡	蒔苗字油伝	畑・宅地	散布地	平安
256	平清水窯跡	小人町、若党町	宅地	窯跡	江戸
257	下川原窯跡	桔梗野 1 丁目 20 の 12	雑木林	窯跡	江戸
258	悪戸青柳窯跡	下湯口字青柳 68	宅地	窯跡	江戸・近代
259	悪戸野際窯跡	下湯口字扇田	畑	窯跡	江戸・近代
260	悪戸扇田窯跡	下湯口字村元	畑	窯跡	江戸
261	扇田 (1) 遺跡	下湯口字扇田	畑	散布地	縄文・平安
353	荒神山遺跡	新法師	畑	墳墓	中世
358	高館遺跡	新法師	山林	散布地・城館跡	縄文・平安・中世
361	八幡館	八幡	畑・宅地	城館跡	中世
362	大浦城跡	五代字早稲田	畑・宅地	城館跡	平安・中世
363	築館	五代字山本	畑・宅地・境内	城館跡	中世
364	一町田館	一町田	畑・宅地	城館跡	中世
365	葛原館	宮地	畑・宅地	城館跡	中世
366	山下館	駒越字如来瀬	田・畑	城館跡	中世
378	五代山元 (1) 遺跡	五代字山本	畑	散布地	平安
379	五代山元 (2) 遺跡	五代字山本	畑	散布地	縄文
380	松本遺跡	横町字松本 91 の 1 外	田・畑・宅地	散布地	縄文・平安
381	平塚遺跡	八幡字平塚	田・畑	散布地	平安
382	村元遺跡	一町田字村元 759 外	畑・宅地	散布地	平安
383	浅井遺跡	一町田字浅井 462 外	田・畑・宅地	散布地	縄文・平安
384	長田遺跡	鳥井野字長田 167 の 1 外	畑・宅地	散布地	平安
385	種本遺跡	如来瀬字種本 70 外	畑・宅地	散布地	平安
386	石堂遺跡	湯口字二ノ安田	宅地	散布地	縄文
387	茶臼館遺跡	湯口字一ノ下り山 10	公園	館跡	縄文・平安・中世
388	湯口長根遺跡	湯口字一ノ下り山	畑	集落跡	縄文
389	五所神社遺跡	五所字野沢 79 の 1 外	境内	散布地	縄文・平安
390	蟹沢遺跡	五所字野沢 125 外	畑・宅地	散布地	平安
396	幸神遺跡	紙漉沢字堰根	畑	集落跡	縄文
397	白山堂遺跡	紙漉沢字山越 132 外	畑・宅地	散布地・集落跡	縄文・平安
398	及位（1）遺跡	紙漉沢字山越 149 外	畑	散布地	縄文
399	及位（2）遺跡	紙漉沢字山越 164 の 2 外	畑・宅地	散布地	平安
400	館の下遺跡	紙漉沢字山越 118 の 1 外	畑・宅地	散布地	平安
415	里見館	五所字里見	宅地	城館跡	中世
416	紙漉沢遺跡	紙漉沢字山越	宅地・畑	城館跡	中世
419	長慶天皇御陵墓参考地遺跡	大助字竜ノ口	畑	墳墓	中世
431	城下町本町遺跡	本町	宅地	城下町	近世
434	茂上 (3) 遺跡	葛原字茂上	畑	散布地	縄文・平安
436	西田遺跡	鼻和字西田	畑・宅地	散布地	縄文・平安
437	長沢遺跡	八幡字長沢	畑	散布地	縄文・平安
438	平塚（2）遺跡	八幡字平塚	畑	散布地	平安
439	左り田遺跡	龍ノ口字左り田	畑	散布地	平安
440	大久保平遺跡	如来瀬字大久保平	畑	散布地	縄文
441	沼田遺跡	五代字沼田	畑	散布地	平安
442	従弟沢遺跡	五代字従弟沢	畑	散布地	縄文・平安
443	宮本遺跡	宮地字宮本	畑・宅地	散布地	縄文・平安
451	一ノ松本遺跡	黒滝字一ノ松本	畑	散布地	平安
452	如来瀬石切丁場跡	如来瀬字山田	境内・山林	生産遺跡	近世